高齢期における生き方モデルの考察

野島　正也
（文教大学）

はじめに

現在の日本の社会状況を「高齢化社会」と呼ぶか，「高齢社会」と呼ぶかについては，多少の議論があるかもしれない[1]。

国連の統計で採用されている基準をあてはめれば，つまり総人口に占める65歳以上の人口が14パーセントを超えた社会を「高齢社会」と呼ぶことにすれば，平成7年以降の日本は「高齢社会」の範疇に属する。しかし生活実感として，人口の高齢化の着実な進行とそれに対応する社会的なしくみが整えられつつあることに注目すれば，現在も社会状況が高齢化に向けて進行中という意味で，今日の社会を「高齢化社会」とみることもできる。

ここでは，比較的多く見られる用語例をとって「高齢社会」ということばを使うが，上でいう高齢化進行の社会の意味も含めておきたい。

「高齢社会」ということばそのものは，いいとも悪いともいえない，いわば中性的なことばである。しかしそのことばの中に，我々はある種の望ましい生き方や社会のモデルを求めている。課題としての「高齢社会」とは，変化の時代にあって，生涯各年代の人々が自らの人生を積極的に受け止め，老いること，長寿であることにプラスの意味をもつことができる社会だということができる。本稿の目的は，高齢社会にあってとくに高齢者が向きあう課題について総括的な考察を加えることである。

この考察では，筆者が地域研究調査や社会教育講座等で経験した断片的な知見を拾ってこれを論旨に沿って意味づけをする作業を含める。いわば考現学的な考察の手法を念頭に稿を進めることにしたい。

1　個人の生き方を支える生涯学習

学習社会（learning society）の思想の発展については，新井郁男等の紹介や論考がある。学習社会とは，端的に言えば，人々が「学ぶ」ということを社会の成り立ちの基本とする社会をいう。日本でこの思想を明確な形で示したものに教育基本法第3条（生涯学習の理念）がある。すなわち，「国民一人一人が，自己の人格を磨き，豊かな人生を送ることができるよう，その生涯にわたって，あらゆる機会に，あらゆる場所において学習することができ，その成果を適切に生かすことのできる社会の実現が図られなければならない」とある。この規定の趣旨を要約すれば，学習社会の要件の一つとして，学ぶ機会が人々に十分に供されていること，もう一つは学んだ成果を生かす社会のしくみがあることである。

地方自治体が実施する生涯学習関連の講座は，それが公金を使て実施されることから，学んだ成果の生かし方については地域活動等での社会還元に重きが置かれがちだが[2]，個人的な趣味・教養・嗜みの涵養も，個人の生き方や人間関係を豊かにするという意味で，またれっきとした成果の生かし方であるのは当然である。

公民館の書道サークルに入っているある高齢の女性が筆者に次のように話したことがある。「一人暮らしをしていますと，夜中に目が覚めたときなどたいへん心細く思うことがあるのです。そんなとき硯を出して筆を動かすと，とても落ち着き，また眠りにつくことができます」。このように，日常的な暮らしの中で学びの成果が生かされることもある。

「学習社会」のしくみづくりについては国・自治体が果たす役割が大きいが，そのしくみのなかで行われる人々の「生涯学習」の営みそのものは，主として私的な領域に属するものである。

高齢期の人々は，その時期の人生にさまざまな「思い入れ」また積極的な

意味づけをもって臨んでいる。以下の例は高齢期にあった文筆家の一文である[3]。

「順序こそ『第二』の人生であっても，内容の濃さでは，それまでの人生に匹敵し，あるいはそれを超えたものといえるかもしれない」（城山三郎）。働き盛りの「第一の人生」と比較して，その経験の上に立つ「第二の人生」に濃密な充実感を期待している。

「肩書のない名刺をもって生きることは，私にとって心意気の部分に属していた。肩書のない名刺で生きられる人間になりたいと思いつづけて生きてきた」（俵萌子）。職業上の「肩書のない名刺」をもつ高齢期の人生に「心意気」を感じている。

「戦ってこその人生であり，勝ったり負けたりしながら，幾多の凱歌を上げつつ，ゆっくりと大海に沈んでいくのが老人力というものではないだろうか」（赤瀬川原平）。自らの老いを従容として受け入れる態度を「老人力」と捉え，老いの構えを見定めている。

文筆家に限らず，高齢期の人々にはそれぞれに生き方[4]についての「思い入れ」（あるいは考え方の枠組み）があり，それに添うようにして，生涯学習の成果が生かされることが重要である。

ところで，以下の例は，自治体が実施した市民大学の受講生（退職後の男性）と筆者の会話のなかで出てきたことばである。「この市民大学に入って自分がだんだん崩れていくのがわかるんですよ」。そういう男性の表情は決して暗くなかった。市民大学での学びでは職場で得た経験則が通じないことが多かったのかもしれない。人は高齢期の「学び直し」（unlearn）を通じて，新たな生き方を手に入れることもある。

また公民館等の公的な学習機会では，宗教観や死生観[5]に関する内容を取り上げることは，稀といっていいほど少ない。このテーマがどれほど公的機関での学習になじむかは別として，高齢者がしっかりと向き合ってこなかった重要な学習領域と考えられる。宗派学習にならない宗教学習として学びの方法論を磨き，生き方の探究のための学習メニューを充実させることが期待される[6]。

2　生きがいの基礎としてのコミュニティ

個人の生き方に影響を与え，ときには人が積極的な生きがい追及にアクセルを踏むきっかけになる主要な要因として，コミュニティの環境がある。ここで，「コミュニティ」はどのようなものかについて，いったん整理しておきたい[7]。

一般に「コミュニティ」の概念には，大きく2つの要件が含まれている。

一つは，地域性である。その基礎に町内，市内など一定の土地の広がりが想定されていること。二つめは，関係性である。人々の間に何らかの共通の関心や意識があることや，協力的な関係があることが要件になる。例えば，○○町○丁目というのは一つのコミュニティを構成するが，それは一つのまとまった物理的な地域を構成し，それを基礎にして自治組織や行事，日常の行き来など，共通の関心や人間関係が成り立っている。

欧米のコミュニティ観にならえば，上の2つの要件のうちで重視されるのは，どちらかというと後者の要件である。例えば「宗派コミュニティ」，「日本人コミュニティ」，「大学コミュニティ」，「バーチャル・コミュニティ」，あるいは「インタナショナル・コミュニティ（国際社会）」などは，明らかに後者，すなわち社会的なネットワークがあることを拠りどころにしている。

退職した人々が生きがいを見出すのには，この第2の要件を備えたコミュニティに与することが重要であり，コミュニティこそが幸せの主要な源泉になるものと考えられる。

玄田有史は実証的な研究をもとに「希望学」という学際的な研究を進めている[8]。玄田は「希望」を次のように定義している。希望とは「行動によって何かを実現しようとする気持ち」（Hope is a wish for something to come true by action.）である。高齢者の日常を意識すれば，「希望」は「生きがい」に直結する概念と捉えることができる。多くの高齢者にとって，しっかりした目標を持ち，戦略的にそれに近づいていける人はそう多くはないであろう。希望は出会いの中で「ゆるやかな期待とつながり」を得るところから始まる。

希望学の視点でいえば，高齢者にとって「コミュニティ」は，自らのアイデンティティを確かめながら，周囲の人間関係の中でゆっくりと希望を紡い

でいく場であるといえるだろう。

ところで，コミュニティの中で高齢者が希望を見いだし，生きがいをもって暮らしていくための社会的装置として，「社会関係資本」（social capital）の概念に注目したい[9]。

地域における人々のネットワークによってもたらされる信頼の関係や協働の実態は，一般に「社会関係資本」と呼ばれる[10]。このネットワークは，人々のヨコの人間関係を基礎に成り立っているのが特徴である。

アメリカの政治学者R・パットナムは，現代社会における社会資本の衰退と再生を分析して『孤独なボウリング』（“Bowling Alone”）を著した[11]。彼はコミュニティを「社会資本の概念的な親戚」とした上で，そのコミュニティの社会的ネットワークが希薄化していく現状を丹念に例証しているが，著書のタイトルがその中身を象徴するものになっている。

かつてボウリングというものは，グループで世間話と軽食を伴いながら楽しむことが多かったが，いまでは一人で黙々とボールをレーンに転がしているボーラーが目立ってきている。そのことは，地域での人間関係が希薄化しつつあることを象徴的に示している。

パットナムはコミュニティにおけるフォーマルなつながりとインフォーマルなつながりにふれて2種の人物類型を示している。一つはマッハー（macher），他の一つはシュムーザー（schmoozer）と呼ばれる。

前者は，地域のフォーマルな組織でさまざまな役割を果たす人である（日本でいえば自治会・ＰＴＡの役員やボランティアグループのリーダーなど）。

後者は，地域での日常的な会話や親交に積極的な人たちである。「マッハーは，コミュニティにおける万能のよき市民である。シュムーザーは活動的な社会生活を送っているが，マッハーとは対照的に，その関与はそれほど組織立ったり目的をもっておらず，より自然発生的でまたフレキシブルである」[12]。

またパットナムは，この2種類の社会的な関与は重なり合うことが多いことも指摘している。つまり地域の役割に関わることがなければ，友人や知人と楽しい語らいの時間も持ちにくいという。パットナムは，シュムーザーの具体的な行動例として，馴染みとコーヒーを飲む，近所で雑談する，家に友人を招いてバーベキューをする，毎日出会うジョギング仲間とうなずきのあ

いさつを交わす,季節の挨拶状を送るなどを挙げるが,それらが地域でのマッハーの役割よりもはるかに頻繁に行われていることを指摘し，日常的に行われるシュムージングが「社会資本の小さな投資」として極めて重要であることを強調している。

高齢者自身が地域でマッハーやシュムーザーとしての役割をとれれば，それに越したことはない。しかしそうでなかったとしても,高齢者が周囲にマッハーやシュムーザーが多く存在するコミュニティの一員であれば，高齢者を含め，地域の人間関係は厚く保たれることが期待される。

3　日常的な「つきあい」の意義

山崎正和は，産業の論理に縛られない社会空間において尊重されるべき人間関係の型を「社交」という概念で説明している[13]。パットナムがいうシュムージングは，まさに「社交」の表現とみることができる。山崎によれば，従来の家庭や企業内集団では,集団のなかでの役割は明確で固定的であった。しかしそれらの関係が人生のほとんどすべてでなくなったとき，人は集団への帰属関係をこれまで以上に自覚的に積極的に作り出していく必要に迫られる。そこでの主要な関心事は「社交」（あるいは端的に「つきあい」）と呼ばれる。

「社交」では，人は「つねに自分を柔軟で未限定な存在として保留し，しかもなお，他人にたいして自発的な存在として維持しなければならない」[14]。また山崎は次のようにもいう。「社交的な人はしらけない人であって，自分のものではないさまざまな感情の物語に『つきあう』ことのできる人である」[15]。

高齢者のなかには,職場での長いつきあいの経験を持っている人も多いが，近隣・地域で，他者の感情を汲み取りつつ，適度の距離感をもって，互恵の関係を保ってつきあっていけるようになるには，まだ経験の積み上げが必要と思われるが，その環境は徐々に整いつつあるように思われる。

おわりに

多くの高齢者は，「地域で幸せになる」ことを願っている。「幸せ」は「仕合わせ」とも書く。古い辞書を引くと「幸せ」ということばは載っていない[16]。「仕合わせ」が本来の綴りであろう。その意味を推察すれば，「仕」は仕事の「仕」，つまり仕事（活動）を合わせることで喜びや楽しさを分かつところから幸せが生まれる，というものであろう。

ところが現代の社会では，一般的に幸せ感が個別化して，テレビをみて幸せ，おいしいものを食べて幸せ，ツアーで景勝地を巡って幸せというように個人的な活動を通じて幸せ感を得ることが多くなっているように思われる。それはそれでよいことには違いないが，一方で，人と一緒になって何かを為すことによる幸せ感を得る場が相対的に少なくなっているのではないか。

高齢期の生き方のモデルは，個別にみれば人それぞれに設定されるものであるが，全体的に見れば，必ずその背後に人間関係があり，「好みに応じた人間関係」[17]を選択的に作り上げることができる社会的基盤がある[18]。その強化ためには，一度は弱体化したコミュニティの社会関係資本の再生がカギとなる。高齢社会の進行と同時に進行する情報通信技術（ＩＣＴ）のイノベーションがコミュニティにおける社会資本の再生に資するように，その確たる方向づけと具体的な手立てが求められている。

注

(1)　現代日本の状況を「超高齢社会」と呼ぶこともある。日本の平均寿命が世界一の水準にあり，「人生100年時代」を視野に入れることが可能となった状況を捉えてのことである。(『長寿社会における生涯学習の在り方について～人生100年 いくつになっても 学ぶ幸せ「幸齢社会」～』，超高齢社会における生涯学習の在り方に関する検討会，文部科学省生涯学習政策局資料，2012.3

(2)　例えば自治体が行う市民大学の設置目的として「地域活動において，主体的で主導的な役割を担える人材を育成する」などと表記されることが挙げられる。

(3)　城山三郎「清忙の大晩年へ」『定年後－もうひとつの人生」への案内』岩波書店，岩波書店編集部，1999，p.5。俵萌子『人生に定年はない』海竜社，1992，p.32。

赤瀬川原平『老人力』筑摩書房，1998，p. 45

(4)　本稿では「生き方」(way of life) を，現在の生活様式に関しての思い入れと将来に向けた人生の展望の2面をさす言葉として使用している。

(5)　山折哲雄は死生観を「西洋にはない人生観，処世観である」として，次のようにいう。「死を見つめなくなってしまったがゆえに，我々にとって大切な死生観をも失った。生きることを考えるかそれ以上に死について考えていた人生モデル，それが死生観」。『「始末ということ』角川学芸出版，2011，p. 79

(6)　新井郁男は「死と生涯学習」に関するエッセーで次のように述べている。「人間の『生は時間的には過去から未来に，空間的にはグローバルな広がりで結ばれている。(中略) 時間・空間の広がりとして『死』をも視野に入れて考えることが重要』，『社会教育』通巻788号，全日本社会教育連合会，2012. 2，p. 5

(7)　野島正也「超高齢社会の当面する高齢者問題とは何か」『社会教育』通巻788号，全日本社会教育連合会，2012. 2，p. 7。なお本稿は上記記事をベースにして執筆した。

(8)　玄田有史『希望のつくり方』岩波新書，2010　p. 45

(9)　野島正也，前掲論文，pp. 7-8

(10)　社会関係資本は，豊かな人間関係などの経済的な価値で表せないソフト価値とそれを促す施設設備等のハードの価値を内容とするが，この文脈では前者に注目する。

(11)　ロバート・パットナム『孤独なボウリング一米国コミュニティの崩壊と再生』柴内康文訳，柏書房，2010。原著発行は2006。

(12)　R・パットナム『前掲書』p. 107

(13)　野島正也，前掲論文，p. 8

(14)　山崎正和『柔らかい個人主義の誕生』中央公論社，1984，　p. 59. なお，引用は旧仮名遣いを新仮名遣いに代えて表記した。

(15)　山崎正和『社交する人間』中央公論新社，2003　p. 23

(16)　例えば，手元の金田一京助編『辞海』三省堂，1958年発行版をみると，「しあわせ」は「仕合」のみが載っている。また新村出編『広辞苑』1979年版をみると，「しあわせ」は「仕合」のみで，「『幸』とも書く」とある。

(17)　平成12年版の国民生活白書で使用された用語「好縁社会」は，好みや関心による人間関係を強調し，血縁，地縁，職縁とは別の切り口でのコミュニティの再生を示唆している。

(18)　別な表現をすれば，「新しいライフスタイルを創造し得る地縁や血縁に捉われな

い『仲間力』」ともいえよう。『高齢社会対策の基本的在り方等に関する検討会報告書～尊厳ある自立と支えあいを目指して～』,高齢社会対策の基本的在り方等に関する検討会,. 内閣府資料，2012，p. 24